

# 英語教育実践報告：スピーキングを促す2つのイベント － Presentation Championship & Bibliobattle －

関戸 冬彦

## Educational Report in English: Two Events to Activate Speaking － Presentation Championship & Bibliobattle －

SEKIDO Fuyuhiko

The main purpose of this paper is to introduce two English events, the Presentation Championship & Bibliobattle, which have been conducted in this faculty, the Faculty of International Liberal Arts, since 2011. In this paper, what two events are, as well as how each event is conducted, will be revealed and discussed. In addition to an evaluation sheet or topics for the presentation as an appendix, possibilities for development will also be mentioned.

### はじめに

本報告は獨協大学国際教養学部言語文化学科において2016年に行われた2つの英語イベント、Presentation ChampionshipとBibliobattleに関する報告である。報告では当該年度の実施、開催内容だけに留まらず、それぞれのイベントについて実施にいたったプロセスを振り返りながら、これまでに行われてきた内容、カリキュラムとの関連性などについても言及しつつ、実施にあたって協力をいただいた担当教員から指摘された問題点や課題点に関しても触れ、最後に両イベントの今後の展望についても述べる。また、いくつかの資料も必要に応じてAppendixとして掲載する。

## 1 Presentation Championship

### 1-0 イベント成立事情

このイベントは学生のグループによるプレゼンテーションコンテストである。プレゼンテーションというだけに、スピーキング活動の一環という位置づけで、2011年に初めて行われた。イベントの発案者は本報告の執筆者であり、発案のきっかけは同時時間帯に同時開講されている必修英語8クラスにおいて何かクラスを飛び越えたイベント的なものは出来ないだろうか、と思い立ったことにある。そのようなイベントを行うことでクラス内の活動、授業も活性化していくのではないかと考えた。そのヒントになったのが、2011年当時世間で話題になった書籍、『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』を読んだ際、そこで言及されていた、チーム制を導入し、競争させ、結果や順位をはっきり出す。そうすることで個人にも責任が生まれる（岩崎、pp.130-131）、という発想であった。つまり、学部学科としてのイベントを開催することで、それに参加、準備する学生たちの学習動機やスピーキング力がより高まり、結果としてイベントは学部学科全体の英語力育成に貢献するのではないかと、思ったわけである。当時の執筆者は非常勤講師という身分であったので、この考えを2011年度の学期が始まる前に専任の先生方に提案、相談して吟味していただき、その後他の非常勤教員とも協議、理解を得た上で学部学科のイベントとして行う運びとなった。

### 1-1 Presentation Championship 2011-2013

2011年当時、国際教養学部言語文化学科としての必修英語カリキュラムにはIE (Integrated English)、Speaking、Writingの3種類の科目があり、IEは週2コマ、ほかは週1コマずつ、の合計4コマを1、2年次で履修する、というものであった。プレゼンテーションなのでSpeakingのクラスで行うのが妥当であるというのは当初からの自明のことではあったが、1年次と2年次のどちらで行うかについては、2年次で開催したほうが1年次の学習、特にプレゼンテーションのスキルの側面、を踏まえているのと同時に、大学という環境にも慣れて気持ち的にも余裕があるだろうとのことから2年次で行うこととした。また、当時執筆者が担当していたのも2年次のSpeakingクラスであったので、運営や遂行にあたって協力しやすいことも背景的事情としてはあった。

イベントの開催場所は小講堂を使用することとし、開催時期にあたっては秋学期、特に11月ないし12月、とした。小講堂の収容人数、また授業内で行うの

で90分間で行える範囲を考慮に入れて検討した結果、1クラスから2チーム選出、4クラス合同で計8チームを一堂に会することにした。この理由としては、1クラス1チーム、8クラス合同で8チームではプレゼンターとしてイベントに参加できる人数が各クラスにおいて少なくなってしまうという点と、8クラス全員の収容が小講堂ではやや難しい、またSpeakingクラスそのものが1限と3限の2つの時間帯に4クラスずつの同時開講であったので違う時限をどちらかに寄せて同時に行うのはそもそも不可能、などがあり、こうした諸条件を踏まえた上での上記結論、1クラスから2チーム選出、4クラス合同で計8チーム、であった。

実際のプレゼンテーションに関する注意事項、ルールとしては、発表時間は7分以内（2013年度より5分以内に変更）とし、1チームの人数は3、4名が望ましく（これまでに2名、5名という例外的人数のグループもあったが）、授業内にてチーム結成を含めた準備、クラス内予選を行い、代表2チームを選出する運びとした。発表する内容、テーマについては自由としてしまうと収拾がつかず、加えて評価もしづらくなるだろうとの懸念から、運営側が発表テーマ数種類を提示し、その中から選ぶ、あるいはそれらに関連するものを学生たち自身が自分たちで選択、考案、そしてまとめることとした。

せつかくこのようにクラスを飛び越えたイベントであるので、優秀者を表彰するべく、当日のオーディエンス、4クラスの学生たち、にベストグループを1チーム選び、投票してもらい、その得票数によって上位優秀2チームを表彰の対象とした。

なお、評価にあたってはどのグループがよかったかという印象的な評価、投票だけに終わらないよう、当日会場では投票以前に各グループを評価するマークシート形式の評価シート（Appendix 1）が配られ、各グループのプレゼンテーションが終わるたびにオーディエンスはそこにマークするよう指示がなされた。このマークシートは運営担当教員のひとりである安間一雄により作成され、回収後の結果の分析も安間によって行われている。その一部は、学会発表という形で安間、関戸により2014年に大学英語教育学会第53回国際大会にて口頭発表された。参考までにその資料を最後に掲載しておく（Appendix 2）。安間によるこの評価シート分析は毎年継続的に行われており、今後また改めてその結果については発表、ないし報告がある予定である。

評価と関連して、このイベントへの参加や貢献度などを成績に加味するかどうかも教員間での議論となり、2013年度からは参加点10%中、最大6%まで含

めてよく、またプレゼンテーション点30%のうち、最大18%まで含めてよいとしましたが、どのようにそれらを扱うかは各教員の裁量に委ねられた。

このような形で2011年に始まったPresentation Championshipは、担当教員の協力、また学生たちの積極的な取り組みに背中を押され、2013年度まで基本的に同様の開催時期、内容で年に一度開催され、計3回行われた。

## 1-2 Presentation Championship 2014-2016

2014年度になり、英語カリキュラム全体の改訂が行われ、必修英語科目から2年次のSpeakingが外れることになった。つまり、2年次のSpeakingという授業そのものが消滅したのである。それに伴い、これまで2年次で行っていたこのPresentation Championshipは1年次のSpeakingへと移動して開催することになったのだが、開催時期や運営、開催方法についてはこれまでのものをそのまま引き継ぐことになった。

該当学年が変わったことにより、担当教員もこれまでと変わり、そういう意味ではまた新たなスタートになったわけだが、それに伴い、以前にはあまり起こらなかった、あるいはあまり検討してこなかった、いくつかの問題点も指摘され、浮上し始めた。ここではその問題点を整理しておきたい。

まずは授業としてのカリキュラムとの整合性に関することで、2014年当時Speakingのクラスで使っていた指定テキストは全体としてChapterもExerciseも多く、特に秋学期、テキストに使う時間とイベント準備に使う時間とのバランスを取るのが難しいという声が担当教員より聞かれた。つまり、テキストの進行とイベントの関連性があまり積極的に見出されず、別個のものが同じ学期内、授業内に同居している状態であるとの指摘であった。原因としては、教員や学生によってはイベントが授業内容外のもの、と認識されてしまった可能性がある。また、イベントにおける評価についての意見もあり、あくまでオーディエンスの投票で優秀者を決めるので、どうしてもパフォーマンス度が高く、その日その場でウケたものが結果的に優勝となり、そうなるとう極端なケースではウケ狙いがあるまま優秀者ということになりかねないのではないか、という点も指摘された。加えて、A-D、E-Hというグループにするとどうしても上位クラスの方が優位なのではないか、という指摘もあったが、クラスのレベル分けとしては、A / BCDE / FGHとしているので、確かにこれらのグループにおいてはAとEがグループ内においては上位レベルのクラスという位置づけになるが、これまでの結果を振り返ってみると、必ずしもそのクラスの選出チー

ムが常に優勝チームであったわけでもないので、また英語力的にDやHが一番不利、ということでもないで、そうした、ある意味の思い込みを払拭するためにも、当日の演出の際の工夫（どのグループがどのクラスであるかを明示しないなど）も必要であるように思われた。

2015年に入ると、カリキュラムそのものの変更はなかったが、授業時間においてこれまで同一曜日時限（水曜2限）に行われていたものが、一部授業日が変わり、4クラスを水曜、もう4クラスを木曜、という曜日分割がなされることになった。これに伴い、イベントも水曜、木曜の2日間連続開催ということになった。昨年指摘のあったテキストとの整合性についてはまず使用テキストが変更された。もちろん、イベントを基準にこの変更がなされたわけではないのだが、準備の時間を取れるよう秋学期に扱うUnitは少なめにするようカリキュラム的には配慮がなされた。しかしそれでもなお、イベントとテキストがリンクしていないとの指摘もあり、それは継続的検討事項となった。

2日連続で行うことに関しては特段問題がなかったものの、運営については、発表後の質疑応答に時間がかかりすぎ、結果として授業時間内に終わりきらない、また発表時間そのものがあまり遵守されていないなどの指摘もあり、これらについても質疑応答の有無やタイムキーパーの設置などが次年度への検討事項となった。

2016年においては2015年までの指摘をなるべく解消するべく、これまではこのイベント用のトピックが複数設定され（Appendix 3）、学生たちはその中から選んでいたのだが、イベントのテーマを授業で扱っているテキスト内から選ぶこととした。具体的にはIn my opinionとIn the Newsという2つのUnitを秋学期に扱うので、その内容に沿ったテーマを各自が設定する、つまり時事的な問題に対して意見を述べる、というスタイルにした。参考までに2016年度の発表テーマも記載しておく（Appendix 4）。質疑応答に関してはどうしても質問したいというオーディエンスがいた場合は受けつけるが、無理にでも学生や教員から募るということはしないことにした。結果としてこれが全体の時間短縮にもつながり、どちらの曜日も90分以内に表彰式まで含めて全てのものを終えることが出来た。なお、2016年度は最終プレゼンテーション30%のうち、15%をグループプレゼンテーション点に割り当てることにしたので各教員はクラス内予選でのプレゼンテーションをこの割合にて評価している。

こうして年々、よりよい内容と運営とを目指して行ってきたが、全ての問題点が解消されたというわけでもない。当日の運営をスムーズにするために、発

表するチームは事前にチームの情報と使用するパワーポイントスライドを運営責任者（つまりは執筆者）に送るように担当教員を通して伝えてもらっているのだが、それがうまく伝わりきらない場合や、スライドの直前の変更などもあってどうしても運営側がそれにより右往左往することもあるので、発表者やその内容とは別個の次元で、運営方法については考慮すべき点があるにはある。しかしこれまで、上記のように検討、対処することでクリア出来た問題点もあるので、今後もひとつひとつ考慮しながらよりよいイベントになるよう試みを続けていきたい。

## 2 Bibliobattle

Presentation Championshipが1年生のイベントになったのと同時に、2年生のSpeakingの授業がなくなったのを受けて、別途違う形で何か2年生で行えるイベントは出来ないかと考えた際に浮上したのがこのBibliobattleであった。Bibliobattle（ビブリオバトル）とは数名のグループを作り、各々が5分間で読んだ本を紹介するという時間制限のある読書会的イベントおよび活動で、京都大学の大学院生らが中心として始めたものであり、その詳しい経緯や行う際の細則などは公式ウェブページやガイドブックに記載されている。現在では書店や新聞社とも連携して行われている場合もあり、世間的にも少しずつその存在が認知されている気配がある。通例この活動は日本語の本を読み日本語で行うものが主流であるが、同じことを英語でやってみてもよからうと思い、このイベントをIEの2年次カリキュラム内に取り入れることにした。奇遇にもIEではBook Reportという形で1年次よりExtensive Readingのカリキュラムを取り入れていたので、読んだ本を英語で口頭にて発表するというのは、ReadingとSpeakingの両方を用いる、まさにintegratedな状態になるので、コースのねらいとも合致している。なお、ビブリオバトルを英語で行っている先例としては関西方面の幾つかの大学生が取り組み、その様子の動画をYouTubeにアップしているが、本学部のように学部学科全体のイベントとして行っている先例はこれまでのところ、耳にはしていない。

イベントの運営方法はPresentation Championshipを基本的に踏襲している。Speaking同様、IEはAからHの8クラス編成で、火曜1限、金曜3限の週2コマを同一教員が学期を通して担当している。また、Presentation Championshipと同じく授業内でのイベントなので、1コマ90分で全て完結するためには発表者の数がある程度制限しなければならない。よってPresentation Championship

に倣い、発表者は8名（1クラス2名選出で4クラス合同開催）、これを2回、別の日時に行うこととした。なお会場設営に必要な時間や学生の参加率を鑑み、金曜3限に2週続けて（E-Hを1週目、A-Dを2週目のように）行うこととした。

会場は本学の大講堂（約500名収容可能な本学最大規模のホール）にした。裏話の内容ではあるが、Bibliobattle開催をIEの全担当教員に了承してもらったのが2014年の6月で、この時点で当該年度に小講堂の予約を取るのには難しかったというのと、このイベントにTEDトークのようなイメージを持っていたため、こちらの会場のほうがそのような雰囲気が出る（事実、照明を司会が手で操作できる）のがこの会場にした理由でもある。開催時期に関しては、これもPresentation Championship同様、秋学期とした。

評価に関しては、Presentation Championshipでは表彰はオーディエンスの投票によって行ってきたが、Bibliobattleにおいてもそれは同じで、奇遇にもBibliobattleの規則的にもベストはオーディエンスの投票で、となっているので投票形式も踏襲した。発表者ごとの評価に関しては安間が作成したこのイベント用のマークシート評価用紙を用いてなされた。なお、投票集計後に得票数の多い1位から3位までを発表、これらの優秀者にはあくまで気持ちではあるが表彰状と景品も授与した。また、Appendix 5に2016年度の優秀者が紹介した本のタイトルのいくつかを参考までに載せておく。

こうして2014年から2016年までBibliobattleは3回行われてきた。幸い、大きな反省点はあまりないのだが強いてあげるとすれば、年に一度しか行わないので会場の照明の使用方法などを運営責任者である執筆者が若干忘れ、初日の設営に多少時間がかかるくらいであろうか。

考慮すべき改善点としては、やはり評価にある。評価は先に紹介したように、オーディエンスが発表毎に所定のマークシートに記入し、ベストは投票で、という2種類を用いているが、これも本の内容の紹介よりもプレゼンターのパフォーマンスによる部分も多く、それはそれでパフォーマンス性の高さは評価できる部分でもあるのだがBibliobattleという本来、本を紹介するという主旨からどの程度までの逸脱なら許容範囲なのかは難しい部分である。実際、2016年の開催後、担当教員のひとりから「これはスピーチのコンテストか、それともプレゼンテーションなのか？」と問われた。あまりにルールを細則化してしまうとそれはそれで窮屈になってしまうが、発表の内容、スタイルとしてどのようなものを目指すべきなのか、に関する具体的な基準はあったほうがよいのかもしれない。この点は、継続的に検討していくべき事項である。

## おわりに

Presentation Championshipを始めて6年、Bibliobattleは3年が経過した。これまで大きなトラブルなく運営出来てきたことは喜ばしいが、改善すべき点もまだいくつか散見されるので、そうした点を改善しつつ、継続していけたらと思う。また、実現可能かどうかはわからないが、Presentation Championshipでは全クラスの優勝決定戦、Bibliobattleでは図書館との連携、さらには学部のウェブや広報といったメディアに取り上げてもらい、優秀な学生がより輝ける演出が出来るかどうかにも検討してみたい。加えて、2014年に大学英語教育学会という学会にて安間と行った共同発表のように、継続的にイベントからわかること、分析の結果などを研究し、発表の場を持てたらと願う。

## 参考文献

- 岩崎夏海『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』（ダイヤモンド社、2009年）
- ビブリオバトル普及委員会『ビブリオバトル入門一本を通して人を知る・人を通して本を知る』（情報科学技術協会、2013年）



Appendix 1

CLASS \_\_\_\_\_

ID NAME BEST PRESENTER = GROUP _____ COMMENTS	<b>YOUR</b>	<b>ID</b>	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0	●
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	0	
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	0	
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	0	
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	0	
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	0	
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	0	
↓GROUP NUMBER													↓GROUP NAME

1	1	2	3	4	1	1	2	3	4	1	1	2	3	4	1	1	2	3	4	
2	1	2	3	4	2	1	2	3	4	2	1	2	3	4	2	1	2	3	4	
3	1	2	3	4	3	1	2	3	4	3	1	2	3	4	3	1	2	3	4	
4	1	2	3	4	4	1	2	3	4	4	1	2	3	4	4	1	2	3	4	
5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	
6	1	2	3	4	6	1	2	3	4	6	1	2	3	4	6	1	2	3	4	
7	1	2	3	4	7	1	2	3	4	7	1	2	3	4	7	1	2	3	4	
8	1	2	3	4	8	1	2	3	4	8	1	2	3	4	8	1	2	3	4	
	#1				#2					#3					#4					↓GROUP NAME

Evaluation criteria

#1. Clear voice?  
 score 1: audible, but rather weak  
 score 2: normally clear in quiet circumstances  
 score 3: sonorous, loud, and clear enough against noises  
 score 4: effectively uses vocal contrast (emphasis, pathetic tone, etc.)

#2. Enough eye contact?  
 score 1: looks at the audience at each sentence end  
 score 2: looks at the audience less than half of the time  
 score 3: constantly looks at the audience without checking the script  
 score 4: effectively conveys information while looking at the audience

#3. Quality of information  
 score 1: weak and vague  
 score 2: OK, but commonplace  
 score 3: clear message  
 score 4: stimulating and inspiring

#4. Language  
 score 1: language is barely understandable  
 score 2: includes formal academic expressions  
 score 3: interactive use of language (paraphrasing, etc.)  
 score 4: effective emphasis, pause, and other control of language

●													●
---	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	---

## Appendix 2

### 2014年度JACET国際大会研究発表用分析要旨

20140712 AK

1. 研究課題：Best presenter として選ばれたグループは分析的観点別細目評価の結果を反映しているか？
  - ・ Best presenter として選ばれたグループに対して与えられた観点別細目評価の合計点は必ずしも全グループの最高得点ではない。Best presenter グループに対する観点別細目評価の合計点と観点別細目評価の合計点が最高位のグループの合計点の間には上位クラス・下位クラス共に有意な差がある。
    - ・ 上位クラス：  $t = 3.154$ ,  $p = 0.0025$ ,  $df = 62$   
Output: 1\_2013PresChmp\_Qnr\_vote\_rank.jsp : Matched Pairs (Upper)
    - ・ 下位クラス：  $t = 3.318$ ,  $p = 0.0011$ ,  $df = 34$   
Output: 1\_2013PresChmp\_Qnr\_vote\_rank.jsp : Matched Pairs (Lower)
  - ・ 分析的評価観点を説明変数とし、Best presenter として選ばれたかどうかを目的変数として要因計画法（1元配置分散分析）を行うと、下位クラスにおいて観点 #2 (Enough eye contact?) が有意な効果として働いている。上位クラスにおいては有意に作用する観点は無い。
    - ・ 下位クラス： #2  $F = 7.3391$ ,  $p = 0.0072$   
Output: 1b\_2013PresChmp\_MatchVote.jsp : Fit Least Squares (Lower)
  - ・ Best presenter として選ばれたグループに対する観点別細目評価の4観点を対象に主成分分析を行うと、上位クラスは1次元であるのに対し下位クラスは2次元を示した。さらに下位クラスに対して因子分析を行うと、観点 #2 に強い第1因子軸が現れた。因みに第2因子軸は観点 #3 (Informativeness (incl. visuals)) に沿ったものである。  
Output: 3\_2013PresChmp\_vote.jsp : Principal Components
  - ・ 考察 上位クラスにおいては4観点が統合的に機能し、Best presenter の投票に繋がっているが、下位クラスにおいて観点 #2 観点 #3 がそれぞれ独立した評価因子として機能している可能性がある。
2. 研究課題：自己評価アンケート項目のうち、どの項目が事前→事後で大きく変化したか？
  - ・ 数値化した4項目の得点はいずれも事後の方が上昇したが、経験の効果があるため有意差を認定することは妥当でない。事後-事前の差が上位クラスと下位クラスで最も大きかった項目はNo.2（「共同作業で準備・発表するにはコツがある」）であった。
    - ・ 上位クラス：  $M = 0.329$ ,  $SD = 0.071$ ,  $n = 85$
    - ・ 下位クラス：  $M = 0.555$ ,  $SD = 0.082$ ,  $n = 63$   
 $t = 2.082$ ,  $p = 0.0391$ ,  $df = 146$   
Output: 2\_2013PresChmp\_aware\_dif.jsp : Oneway of #2d by Group
  - ・ 考察 特に下位クラスにおいて、発表経験を通してプレゼンの諸要件すなわち分析的細目評価の観点到習熟・上達することが成功に繋がると認識されたと考えられる。

### Appendix 3

- (a) “Globalization in our daily life”
- (b) “Here lies our future: idealism and reality”
- (c) “Our commitment to the community – does it save the world?”

### Appendix 4

#### 2016年度 Presentation Championship Topics

Violent Games Does NOT Matter to Children’s Crime / Big family vs Only child / iphone vs android / Can you accept “Homosexual Marriage” in Japan? / Welcome to Gunma / What do you think of AI? / A CHILD NOT A BRIDE!!! / Online Education is just good as classroom learning

The benefits of Pokémon GO / wedding ceremony is important / SNS / Should We Stop Playing Pokémon GO? / An Aquatic City / Plastic Surgery / Autumn college entrance period / ALL YOU CAN EAT is BAD

### Appendix 5

#### 2016年度 Bibliobattle Books (一例)

Justice (Michael Sandel) / The Giver (Lois Lowly) / The adventures of Tom Sawyer (Mark Twain) / Frankenstein (Mary Shelly) / Five children and it (Edith Nesbit)